
± Days 《Extra》

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

±Days 《Extra》

【Nコード】

N0086Y

【作者名】

空月

【あらすじ】

±Days番外集。過去話だったりこぼれ話だったり小ネタだったり。現在過去話のみ。本編「投げやりアドバイス5題」まで目を通してから読むの推奨。でないとうっかり主人公を逆ハー主人公と間違ふ恐れがあるかもしれません。現段階では本編コンセプト「逆ハーを脇から見よう」の影も形もないので注意。別サイトにて掲載中のものの転載です。

手放せないもの（前書き）

時系列は本編前。カンナ視点一人称。

手放せないもの

何の用？と、開口一番、どうでもよさそうに彼女は言った。

手土産にお菓子と茶葉、ついでに読みたがっていた本を持った僕を見た彼女は、仕方がなさそうに溜息を吐いて家に上がらせてくれた。

「……金かったものは好きじゃないって言ったの忘れたのかこの鳥頭」

「どれも家にあつたものだよ。新たにお金はかけてないから譲歩してくれないかな」

「……ま、いいか。せつかくだしこのお茶淹れるかな。本は今度返す」

「もらってくれてかまわないんだけどね？」

「いやだね。借りを作るみたいで気持ち悪い。特にあんた相手だと碌なことにならないさうだし」

容赦のない彼女の言葉に笑う。マゾなの？と嫌そうに言われたけどいつものことだ。

「さすが。いい茶葉だね」

「まあね。気に入ったのならまた持ってくるよ」

「一缶で充分だったの」

いい加減、好意は素直に受け取って欲しいものだけど、彼女だから仕方がない。

それに、僕も他のみんなも、彼女のそういうところが好きなのだ

し。

「……何普通に和んでんだこの野郎。とっとと本題にいけ本題に」

「僕、用事があるなんて言ってないと思うけど」

「嘘つけ」

「嘘じゃないよ」

「今までの行動パターンからしてバレバレなんだよ。さっさと吐けこの阿呆」

乱暴な物言いだけど、さりげなくお茶のおかわりを淹れてくれる。それは話を聞いてくれるっていう、彼女なりの合図。

……だから彼女には、敵わない。

「ちょっと、疲れてね。逃げ出したいなあ、なんて思っちゃったりしたわけだよ」

「そりゃオツカレサマ。……逃げる、ねえ。あんたいつとも逃げてんのに、今度はどこに逃げようっての？」

「……手厳しいね」

「これでも甘くしてるつもりだったんだけど」

「……」

「別にね、害がないしほつともいいんだけど。一応幼馴染としてあんたを多少まっとうな人間に留めておいてやらないとマズイかな、くらいは思っわけだ」

「すごい言い様だね」

「オブラートに包んでるんだが足りなかったか？ 小児用の飲み薬レベルに甘くしてやるうか」

「遠慮するよ」

彼女から、真意はどうあれそんな甘い言葉が出てきたら天変地異が起こりかねない。

それに、——そうなつたらますます手放せなくなる。彼女もそれを知ってるから、甘い言い方をしないのだろう。

「ま、甘やかして欲しいなら他を当たりなよ。どーせよりどりみどりなんだし?」

「そんな節操なしと思われていたなら心外だな」

「思っちゃいないが素質はあると思ってるよ正直なところ。つつかあんたがそれくらい甲斐性のある男だったらまだマシだったんじゃない? 適度な息抜きが出来る?」

「もしそんな男だったら、君はとくに僕から離れていただろう?」

「さあね。離れてたかもしれないそうじゃないかもしれない。まー、少なくとも今のあんたよりは健康的だと思うけどね。あんた周りに心配かけすぎなんだよ」

「? 周り?」

「そこにおいてる観葉植物と壁にかかっている絵、流してるクラシックCDとそのティーセット、今日夕飯になる予定の高級食材諸々、全部あんたのこと心配して頼みにきた奴らの手土産だ。いい幼馴染を持ったな?」

人の悪い笑みを浮かべた彼女は、やっぱりいつもと同じだけど——声は、少しだけ優しくかった。

「この時間に来たってことはこの後空いてるっしょ。せっかくだし夕飯食べてけば? 味に文句言ったら叩き出すけど」

「文句なんか言うわけないよ。……ありがとう」

素直に礼を言うあんたは気味が悪い、と容赦のない言葉を投げられたけど、本当に感謝してるんだ。

気を張らなくていい場所。取り繕う必要のない場所。無言の期待も、覆い隠された悪意も、ここにはない。

その全てを僕は自分で選び取ったけど、それでも、それだからこそ、嫌になるときがある。全て投げ出してしまいたくなるときがある。

だからこうして、知ってて逃げ場所になってくれる彼女には感謝してるんだ。それはきつと、他のみんなも同じだろう。

手放せなくてごめんね、と、僕は彼女に聞こえないように呟いた。

変化（前書き）

時間軸としては本編前。レンリメインで会話オンリー。

変化

「ん？ ……あれ、レンリ？」

「……ひさしぶり」

「どした？ 今日なんか約束してたっけ」

「してない。 ……会いたかったから、きた。 迷惑だった？」

「いや別に。 うーん、それにしてもあんたのその物言いにも慣れたなホント」

「？」

「こつちの話、気にすんな。 ……ま、入れば？ 口には合わんかもだが茶くらい出すし」

「あ。 ……ケーキ、持ってきた」

「ありがと。 んじゃ一緒に食べるとするか」

「あー、美味しい。 レンリが持ってくるケーキは外れがないね」

「気に入ったなら、よかった」

「そついや他の奴らが最近大人しいっつーか変っつーかそんななんなんだけど、なんかあったの？」

「……あつたような、なかったような」

「？ 珍しく煮え切らない返答。よーわからんけどこっちに害がないならいいや」

「………」

「お茶おかわりいる？」

「……うん」

「………」

「………」

「………」

「……もし、」

「ん？」

「もし、みんなが………」

「うん」

「変わった、ら。……今までみたいには、いられない、かな」

「んー。それはなんとも。実際変わんなきゃわかんないっしょ。でも変わらないものってのはそうそうないしねえ。どーいうことになってもそれはそれとして受け止めるしかないと思うけど」

「……………」

「それに、レンリはなんかそれがすごく悪いこととか怖いこととかに思えてるみたいだけど、もしかしたらいいことかもだしね。あんたはちよつとネガティブに考えすぎなんだって」

「……そう、かな」

「さあね。あくまでこれは一意見だから。悟りなんぞひらいてないから真理とかわからん」

「……そっか」

「そうそう。とりあえずもうちよつと気楽に考えれば？　今までだって環境なり立場なり、あんたたちにそれなりに変化はあったけど、結局大して変わんない関係のままだし」

「……でも、次がそうだとはい……限らない、し」

「だーかーらー、そこはそれ、実際変わってみなきゃわかんないっつて。ずっと今のままじゃいられないってのはあるけど、少なくともあんたらまだ学生だし、そんなすごい変化はまだ無いっしょ。ま、なんとかかなると思ってなよ」

「……………」

「……あー、もー」

「……？」

「ものすつごい不安そうな顔してる自覚ある？ ついでに言えば物欲しそうな顔でもある」

「……ちよつと、は」

「言葉が欲しいわけか」

「……………うん。ごめん」

「仕方ないなー。そういうこと言うの、柄じゃないんだけど」

「甘えてて、ごめん」

「その言い方もずるい、——というか返しに困る」

「……ごめん」

「いーよ。カンナとかミスミとかと比べれば可愛いもんだし」

「……………」

「まず言つとくと、少なくとも私から関係を切ることはいらないから。そりゃ、あんたらと付き合うのってわりと大変だけどね。まあでも私結構あんたらのこと好きだし。もうちよつと常識学んで欲しいな」

「とは常々思ってるけど」

「……常識……」

「そ。まあ、何を持って常識とするかって問題はあるけど。基本的にあんたたちの行動って過剰だから、その辺をどうにかして欲しいというか」

「……ど、努力する……」

「まあレンリはわりとマシな方だと思うけど。あいつらの中じゃ常識人に近いし。一緒にいて疲れないし」

「ありが、とう……？」

「お礼を言われても困るんだけど……ともかく、少なくともレンリが望むなら、私は『今まで』通りに接するつもりではいるから。他の奴のことは管轄外だけど」

「……ありがとう」

「私が好きでやることだから、お礼は別にいらないんだけどね。――あ、わかってると思うけど、あいつらには今の言わないように。調子乗ってウザいから」

「……………」

「頷くのはいいんだけど、そのなんかはにかんだ笑顔は何？ 今の笑うところじゃなかったよね？ 幼馴染をウザいって言われたのに怒るならともかく」

「……………」

「……………」

「……………わからないなら、それでいいと思う……………」

「え、ちょ、何？　そう言われるとすごい気になるんだけど」

「気に、しないで……………」

「いやいや気になるものは気になる——っていうかレンリ、この歳にもなつて上目遣いをお願いするってどうなの。なんか似合っちゃってるのもどうなんだと思わなくもないけど」

「……………」

「無自覚か……………天然って恐ろしいなホントに」

「……………天然？」

「そこで疑問形になるのが天然の天然たる所以だよな」

「どういつ……………」

「うん、まあ気にするな」

「？　……………わかった」

「……………だから、そこで素直に言うこと聞くとこが天然なんだって…

⋮

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086y/>

± Days 《Extra》

2011年10月30日07時06分発行